

はしがき

一橋大学創立 150 年史準備室長

阿部 修人

長かった新型コロナ禍の影響も一段落し、2022 年度には一橋大学のキャンパスに学生や国立市民の姿が戻ってきました。新型コロナ禍の影響は完全には消えていませんが、日常がようやく戻ってきたと言えます。そして、無事に「一橋大学創立 150 年史準備室ニューズレター」第 9 号をお届けできたことに安堵しています。これは、例年通りご多忙の中、執筆にご協力いただいた執筆者の皆様、そして編集に携わった一橋大学学園史資料室のスタッフの努力の結晶です。心よりお礼申し上げます。

本年度のニューズレターは、12 本の記事が掲載されました。杉山武彦一橋大学元学長によるエッセイでは、一橋大学における交通学研究の歴史と杉山氏の研究歴が詳しく紹介されています。一橋大学における交通学の歴史は古く、明治 32 年の高等商業学校時代まで遡ることができるのは、筆者自身も知りませんでした。杉山氏ご本人の記録も、昭和 40 年代の一橋大学の雰囲気伝えるもので、楽しく読ませていただきました。

本学名誉教授の米倉誠一郎氏は、同名誉教授である今井賢一氏の功績に関する連載の前編を寄稿してくださいました。米倉氏は、産業経営研究所の助手として採用されて以来、長い間、今井氏の活動を身近に見てこられました。今井氏が本学商学部にもたらした新風、学長選考における「除斥」という本学学園史上の大事件、そして米倉氏を含む「四人組」の活動は、当事者でなければ書けない内容です。また、米倉氏ご本人の研究歴も興味深いもので、本学商学部の一時代を示す資料と言えます。

石原延啓氏のエッセイには、昨年亡くなられた石原慎太郎氏本人による未発表のエッセイが含まれています。石原慎太郎氏のエッセイは、彼の学生時代や寮での生活に対するノスタルジーを書いたもので、石原延啓氏が述べるように、本学に対する彼の強い思いを感じるものです。石原慎太郎氏が復刊した『一橋文芸』において、彼が穴埋めに作った「灰色の教室」が高く評価され、石原慎太郎氏の小説家としてのキャリアを築くきっかけとなったことは広く知られていますが、石原延啓氏は、ご家族の視点から石原慎太郎氏について語られており、石原慎太郎氏という稀代の作家の一面を知る貴重な内容となっています。

平尾光司氏には、「一橋曼茶羅」というタイトルがふさわしい、多彩な人々との交流や興味深い体験談をご寄稿いただきました。平尾氏は 1950 年代の一橋大学の学生生活、入学試験から安保闘争まで、とても詳しく思い出されており、当時の充実した学生生活を窺うことができます。ロージナで開催された都留重人本学元学長によるゼミナールの様子や本学名誉教授高島善哉氏に関するエピソード、さらには卒業後のニューヨーク勤務中でのノーベ

ル経済学賞受賞者達との交流、若い芸術家たちへの支援等、そのご活躍ぶりには目を見張るものがあります。

有賀貞一氏と春山祥一氏による寄稿は、学生サークル「電子計算機研究会」や「一橋 IT 経営研究会」などの活動について触れたものであり、前者は 1960 年代、後者は 1999 年以降の様々な活動について詳しく述べられています。有賀氏の学生時代のコンピュータ関連の活動は、バイタリティにあふれており、本学名誉教授の宮川公男氏、杉田元宜氏達が、当時の学生に、そしてその後の日本における ICT 産業に与えた影響の大きさを示しています。春山氏が紹介されている「一橋 IT 経営研究会」は、本学の学部講義を担当し、IT 業界の現場を学生に伝える人気講義となっています。また、「一橋電脳同窓会 JFN」(如水会フォーラムネットワーク)には、参加していた人も多いのではないのでしょうか。私も過去に参加したことがあり、とても楽しく読ませていただきました。

佐々木宏夫氏のエッセイは、一橋大学名誉教授である二階堂副包氏に関するものです。二階堂氏は、日本の経済学の水準を飛躍的に高め、特に一般均衡理論における貢献で世界的な名声を誇っています。私は、エール大学で数理経済学者として名高いハーバート・スカーフの授業を受けた際、二階堂氏の研究が紹介されたことを覚えています。二階堂氏に学んだ佐々木氏のエッセイは、二階堂氏の人となりだけでなく、ジェラルド・ドブリューやライオネル・マッケンジーなど、同世代の世界的な数理経済学者たちとの興味深い逸話を含んでおり、本学学園史だけでなく、広く数理経済学に関心のある方にも読んでいただきたい内容となっています。

大蔵省時代も含め、一橋大学出身者として初の次官となった矢野康治氏によるエッセイは、ご本人の学生および官僚時代の名誉教授荒憲治郎氏・石弘光氏等のエピソードで彩られています。石弘光氏は私の指導教官でもあり(石先生と書かせていただきます)、かつ消費税が導入された 1989 年、私はちょうど学生だったので、石先生と消費税に関する記述を読むと、石先生の語り口が昨日のここのように思い出されます。

大塚久美子氏は、本学元学長塩野谷祐一氏のゼミナールに関するエッセイを書かれています。塩野谷祐一氏のケインズやシュンペーターに関する論考はとても有名ですが、教育者としての側面はあまり知られていないのではないのでしょうか。塩野谷氏の、本学における最後のゼミナリス滕の一人であった大塚氏は、毎回のゼミの内容を含め、実に詳細に記録を残されており、ゼミで報告された内容を見ると、アマルティ・セン、フランク・ナイト、アラン・ギバード、リチャード・エプSTEIN、ジョン・ハーサニ達による有名な論文・著作が並んでおり、とても高度な内容であったことが窺えます。

本学名誉教授野田博氏には体育会バトミントン部に関するエッセイをご寄稿いただきました。野田氏は、指導教官でもあった本学名誉教授堀口亘氏からバトミントン部の顧問を引き継ぎ、23 年間担当されました。そして、バトミントン部には、野田ゼミ第一期生も参加されていたとのこと。教育と課外活動の間にこのような関係が生じることも、ゼミナールを

重視する本学の特徴でしょうか。顧問の視点による課外活動のエッセイはとても新鮮で、本学の課外活動の貴重な一側面を伝えるものになっています。

本学名誉教授田崎宣義氏による連載「一橋の今昔」の第四回目となる本号では、いわゆる「ベルリン宣言」に関して、詳しく考察されています。『一橋大学百二十年史』では、福田徳三らによる「商科大学設立ノ必要」と題する文書を「ベルリン宣言」と呼び、その後本学の大学昇格運動に大きな影響を与えたとしています。今回の論考で、田崎氏は、『高等商業学校同窓会々誌』15号（1901年4月）に、なぜ「商科大学設立ノ必要」が掲載されたのか、とても詳しく考察を展開し、本学の大学昇格において、いわゆる「ベルリン宣言」が果たした役割について再検討されています。これは、本学の大学昇格に関心を抱く者には必読の論考となっており、さらに、学園史を語る際に、資料から事実関係を確認することの重要性を再認識させるものとなっています。

野村由美氏は東京大学文書館柏分館に保存されていた貴重な本学の記録に関して報告しています。昭和初期、本学の専門部学生主事補であった福羅繁久氏の事務記録と関連資料がなぜ東京大学で保管されていたかははっきりしませんが、東京大学の協力を得て、これまで存在が知られていなかった貴重な資料のデジタルコピーを入手することができました。2021年の12月に野村氏が柏分館に行かれた際、私も同席させていただきました。その貴重な資料を初めて見た時の興奮は忘れられません。几帳面な字で記録されていたのは、昭和初期の学生達が引き起こした様々なトラブル及びその処理で、昭和初期のやんちゃな学生達の様子が窺えると同時に、学生管理を担当されていた福羅氏の奮闘も伝わってきます。さらに、いわゆる白票事件に関しても多くの資料が残されており、大学事務サイドから見た白票事件に関する資料として、本学の学園史における一大事件の解明が進むことが期待されます。

酒井雅子氏の商法講習所に関する本格的な論考では、東京会議所の設立、および同会議所における商法講習所の地所を手配した経緯について、とても詳しく調べられています。特に、松平周防守の屋敷であった木挽町の広大な土地（現在、新橋演舞場が建てられています）が、商法講習所および森有礼宅となる歴史は、大変興味深いものです。渋沢栄一や福沢諭吉といった、本学学園史でおなじみの名前に加え、間接的に本学に関わった多数の人物が登場し、大変勉強になりました。

以上、今回、12本もの玉稿を頂きました。創立150周年も近づき、本学には150周年記念準備室が設置されました。150周年を機会に、未来に語りつなぐ資料の収集・整備を進め、学園史の分析を進めていきたいと思っております。今後も変わらぬご支援をお願いいたします。